

# 被災地支援研修会レポート

## 多摩NT・国立・東久留米・青梅市場

実施：平成24年11月14日（水）

参加者：25名

行程

国立市場号		東久留米市場号	
06:09	国立市場出発 スケジュール説明・事業説明 放射性物質、検査体制等の説明	05:52	東久留米市場出発 スケジュール・事業説明 放射性物質、検査体制等の説明 (DVD)
11:00 } ↓ } 12:12 }	JA 伊達みらい「んめ〜べ」	11:00 } ↓ } 12:12 }	JA 伊達みらい「んめ〜べ」
13:10 } ↓ } 14:25 }	福島県農業総合センター	13:05 } ↓ } 14:25 }	福島県農業総合センター
19:00	国立市場到着、解散	18:59	東久留米市場到着、解散

### 《JA 伊達みらい「んめ〜べ」》

- 場長の挨拶
- 市場関係者代表挨拶
- JA 伊達みらい直売所 店長挨拶、「除染の取り組み等」について説明
  - ① 震災発生から昨年5月までは（放射性物質の危険性のため）土を触ることすらできない状況であった。
  - ② 米などの検査は2重、3重の体制を敷いている。
  - ③ たけのこなど山菜類は放射性物質が検出されるため、早めに検査をして出荷されないようにしている。
  - ④ 田畑については、ゼオライトやカリウムを用いて除染している。

- ⑤ 昨年 11 月からは桃や柿の樹木は皮を全て剥いたり高圧スプレーをして除染している。その結果、8 割ほど数値が下がった。
- ⑥ あんぽ柿などは濃縮しているため、基準値 100 ベクレルを超えてしまう場合があり、昨年に引き続きまだ出荷できない状況である。
- ⑦ 「地消地産」として、まずは産地で消費することによって全国の消費者に安全をアピールしている。

### 《意見交換・質問等》

#### ・売買参加者

まだ消費者からは、原発から放射性物質が漏れているのか聞かれることがある。消費者にとっては検出値は低いほうがよいため、基準値 100 ベクレルであっても、スーパーが 60 以下しか出さないとすれば、国（基準値）の信用が損なわれてしまう。

#### ・JA

シンチレーションで 50 以上出れば、さらにゲルマニウム検査をしている。それでも 50 ベクレルを越えれば出荷は自粛している。

#### ・売買参加者

消費者には、例えば、検査されたりんごを 1 日何個食べ続けても大丈夫だとか、人体への影響や代謝で出て行くことなど、そういった情報提供をすべきではないか。具体的な数値をいわれても消費者にはわかりにくいと思う。消費者が気にするのはメディアの情報であって、我々の情報ではない事実を踏まえた周知活動を考えたほうがよい。

#### ・JA

出荷前の検査は、同じ生産者でもそれぞれの畑ごとの青果物について検査をかけていることで、検査を漏れを極力無くすようにしている。また、農薬の使用履歴も記録している。

#### ・売買参加者

保育園に納入している場合、薄れてきているが福島産は敬遠されるのが事実としてある。国や東京都が保育園を運営しているのだから、単に食べて応援するというのではなく、別の支援の仕方があると思う。

#### ・JA

福島産というだけで全く受け付けない人もいる。そういう人には何を言っても聞いてもらえないが、以前と比べて少しずつ福島産の青果物が各機関などに納入されてきている。

#### ・売買参加者

検査に合格したものについては、JA が自信を持って出してきたといえど販売しやすいため、JA には大きなラベルなどを貼ってもらいたい。

### 《福島県農業総合センター》

○福島県農産物流通課長「県の取り組みおよび検査方法について」説明

- ① 本農業総合センターでは、モニタリング検査の前の段階で、土から植物に放射性物質がどの程度移るか、また出ていくのかの研究等も行っている。作物への移行は、どんなに移行の比率が高い作物でも 3/1000 である。
- ② 放射性物質のモニタリング検査については収穫前と出荷前に実施しており、検査結果は県のホームページにて公表している。
- ③ 次に各産地での JA 等の出荷者が自主検査を実施している。(主にシンチレーション検出器)
- ④ 日常食において検出される放射線量は、現在県内 1 人 1 日あたり 2.6 ベクレルであり、非常に低い水準となっている。原発事故発生前の過去最大値は 1960 年代の 4.4 ベクレルであり、過去の方が高く、現在の 2.6 ベクレルという水準は恐れるに足りないことがわかる。

### 《参加者の感想》

- 1 誤解している部分もあり話を聞いてしっかりした知識を身につけることができた。一緒に福島を PR していきたい。
- 2 都立小学校では、栄養士が福島産の生鮮食料品を断っている。栄養士の教育もしてほしい。
- 3 産地の努力を目のあたりにし、経済活動活性化による支援の必要性をより一層感じた。情報提供方法について考えさせられた。
- 4 実際の圃場に行って生産者の生の声をもっと聞きたかった。
- 5 消費者の信頼を得るためには地道に検査を積み重ねることが必要であると思った。

以上

## 【写真】



① J A伊達みらい「んめ〜べ」  
・自主検査の説明を受ける。



② J A伊達みらい「んめ〜べ」  
・検査室の様子、検査機器は2台体制。

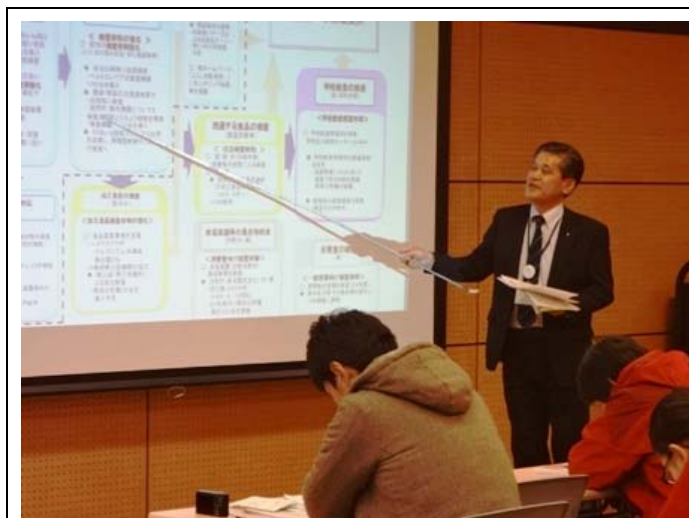


③ J A伊達みらい「んめ〜べ」  
・場長挨拶、店長からの検査体制等についての説明。



④ J A伊達みらい「んめ〜べ」

## 【写真】



⑤福島県農業総合センター

・農産物流通課長による福島県の検査体制についての説明を受ける。



⑥福島県農業総合センター

・会場全体の様子。



⑦福島県農業総合センター

・検査室前で詳しい説明を受ける様子。



⑧福島県農業総合センター

・検査室内のゲルマニウム検査機器。